

鴻臚館関係年表

和暦	西暦	主なできごとと鴻臚館
宣化1	536	河内・尾張・伊賀国等の屯倉の穀を選び、那津に官家を修造する。また、筑紫・肥・豊の三国の屯倉も同所に集める（那津官家は太宰府の起源。比恵・三宅遺跡に比定）。
崇峻2	589	—隋、中国を統一する—
推古16	608	遣隋使小野妹子、隋使裴世清らを伴い筑紫に帰着。
推古17	609	筑紫大宰、百濟僧道欣らが肥後國葦北津に来着を奏上する（筑紫大宰の初見）。
推古26	618	—隋滅亡、李淵（高祖）、唐を建国（628年中国を統一）—
舒明2	630	犬上御田鎌らを唐に派遣（第1次遣唐使）
大化1	645	—大化改新を開始— 中大兄皇子、中臣鎌足ら、飛鳥板蓋宮大極殿にて蘇我入鹿を暗殺。
天智2	663	—日本・百濟の水軍、唐・新羅の水軍に大敗（白村江の戦い）—
天智3	664	対馬・老岐・筑紫に防人・烽を置き、水域を築く。翌年、大野城・基肆城を築かせる。
天智10	671	郭務棕等を筑紫（大津館か）に宿泊させる。翌天武1年、新羅使金押夷らを筑紫に饗応し、禄を賜う。
天武1	672	—壬申の乱起こる—
天武2	673	高句麗使椰子・新羅金羅らを筑紫大郡に饗応し、禄を賜う（筑紫大郡の初見）。
天武5	676	—新羅、朝鮮半島を統一する—
朱鳥1	686	新羅使金智祥を饗応するため、川原寺の伎楽を筑紫に運ぶ。
持統2	688	新羅使金霜林らを筑紫館に饗応し、禄を賜う（筑紫館の初見）。
持統3	689	新羅弔師金道那らを筑紫小郡に饗応し、禄を賜う（筑紫小郡の唯一の記事）。
持統8	694	—藤原京に遷都—
大宝1	701	対馬の金の貢上で大宝と改元。大宝令による官名官位号を改制。—大宰府の組織が確立—
和銅3	710	—平城京に遷都—
霊龜2	716	鴻臚館跡から霊龜3（養老元）年前後の木簡出土。
養老1	717	第9次遣唐使阿倍仲麻呂・吉備真備・僧玄昉ら入唐。
天平8	736	遣新羅使、阿倍継麻呂ら、新羅に向かう途上、筑紫館で万葉歌を詠む（万葉集巻15）。
天平勝宝4	752	—東大寺、盧舎那仏開眼供養を盛大に行う—
天平勝宝5	753	唐僧鑑真来日して、大宰府に到る。
延暦13	794	—平安京に遷都—
延暦23	804	第18次遣唐学問僧、空海・最澄ら入唐。
承和5	838	第19次遣唐副使小野篁、大宰鴻臚館にて唐人沈道古と詩を唱和する（鴻臚館の初見）。
天安2	858	入唐僧円珍（天台宗）、唐商人李延孝の船で帰国し、鴻臚北館門樓で詩を詠む。
貞観11	869	新羅海賊船、豊前国の年貢船綿を掠奪し逃走。一連の記事に鴻臚中島館と津厨。また、博多津警固のため、大宰府の統領1人・選士40人と甲冑40具を鴻臚館に移す。
貞観12	870	大宰府の甲冑110具を鴻臚館に移す。
寛平6	894	—遣唐使を廃止—
寛平7	895	博多警固所に夷俘50人を増員する。
延長5	927	鴻臚館に兵馬20頭を分置する。
天慶8	945	呉越の船が松浦郡に来着し、鴻臚所に安置する。
寛仁3	1019	刀伊の入寇。（博多警固所で合戦）
永承2	1047	大宰府、宋商人宿房の放火犯人4人を捕らえる。



利用料金 無料

- 開館時間 9:00～17:00 ※入館は16:30まで
- 休館日 12月29日～1月3日
- 交通案内 市営地下鉄赤坂駅2番出口より徒歩10分
西鉄バス バス停「平和台鴻臚館前」より徒歩5分
- 舞鶴公園駐車場をご利用ください

お問い合わせ
 ◎鴻臚館跡展示館
 福岡県福岡市中央区城内1-1（舞鶴公園内）
 092-721-0282
 ◎福岡市 教育委員会 文化財整備課
 092-711-4666

史跡 鴻臚館 跡

こう ろ かん

KOROKAN ATO

福岡市教育委員会



上図は発掘初期の想定図であり、現在では南館と北館の二館が確認されている

西公園は万葉集で荒津崎、能古島の東端は也良の崎として詠まれている

所在地:福岡市中央区城内
 国・史跡指定日:平成16(2004)年9月30日
 指定面積:48,027平方メートル

鴻臚館とは

鴻臚館はわが国の古代(飛鳥、奈良、平安時代)の中国・唐の商人や朝鮮の新羅などの外交使節をもてなした迎賓館です。また、わが国の外交使節である遣唐使や遣新羅使の送迎の施設にも使用されました。鴻臚館は平安京(京都)、難波(大阪)、筑紫(福岡)に設けられましたが、遺跡の存在が確認されたのは、この筑紫の鴻臚館だけです。

筑紫の鴻臚館の役割をもつ施設は、飛鳥・奈良時代にはその時々に応じて筑紫大郡、筑紫小郡、筑紫館の名称で呼ばれていましたが、平安時代に中国の外交施設である「鴻臚寺」にならって「鴻臚館」の名称に統一されたようです。

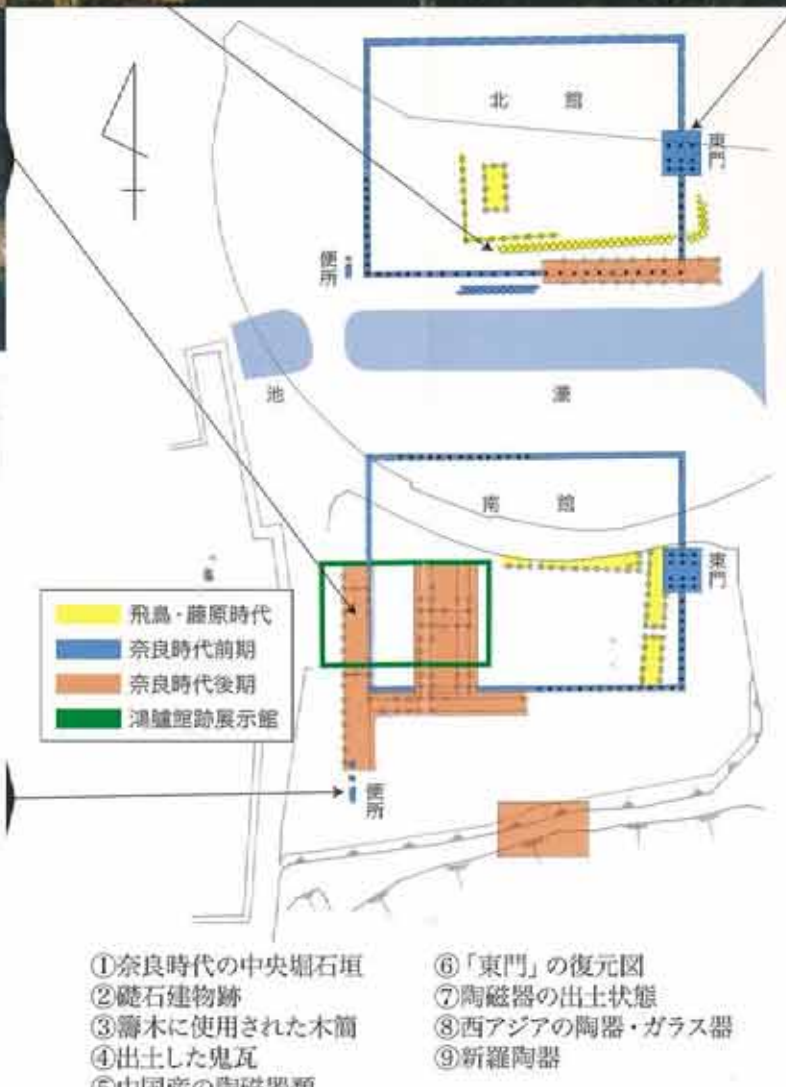
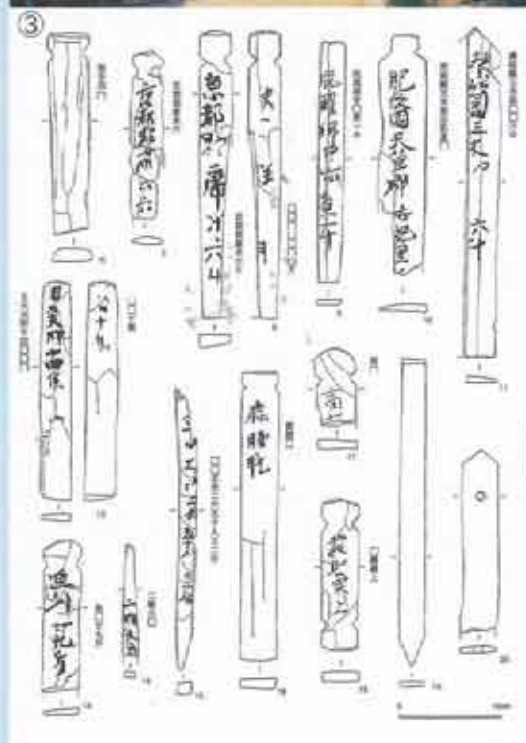
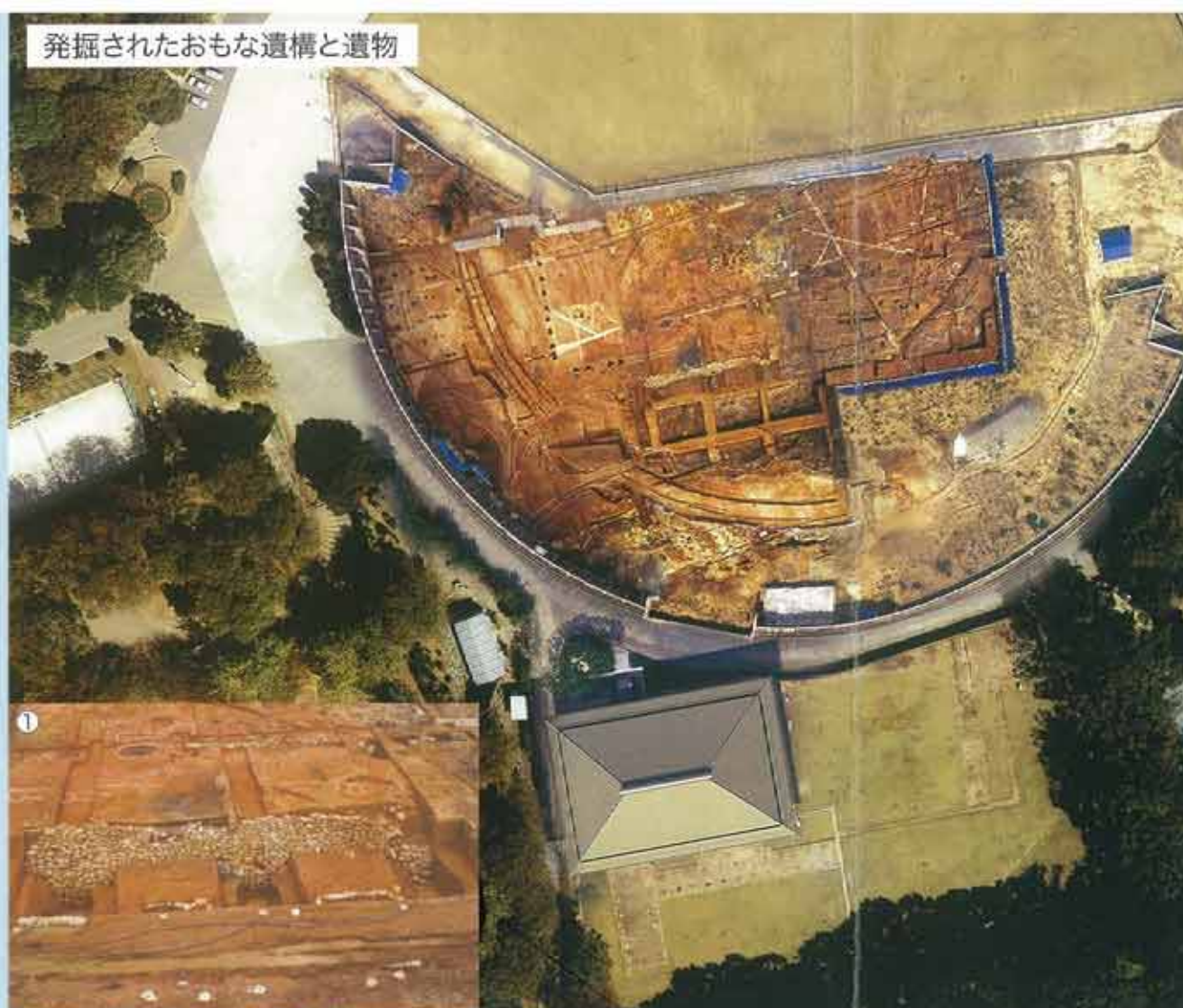
この鴻臚館は1047(永承2)年の放火事件の記事で史料から姿を消しますが、7世紀後半から11世紀前半までの約400年間、対外交渉の窓口として重要な役割を果たしました。

鴻臚館跡展示館は、遺跡の上に覆屋を建て、発掘された礎石と想定復元建物を公開し、発掘から建物復元までの過程を表現したものです。また、展示館の周囲には、建物跡などを地表に表示しています。

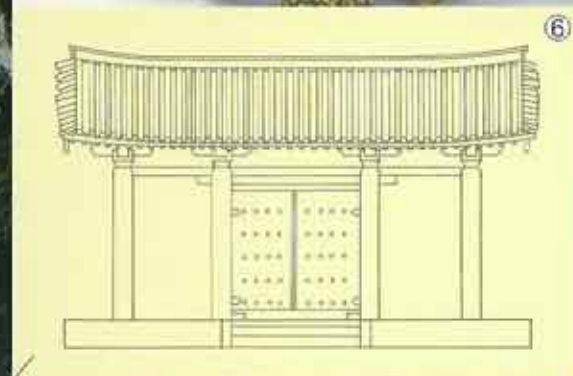
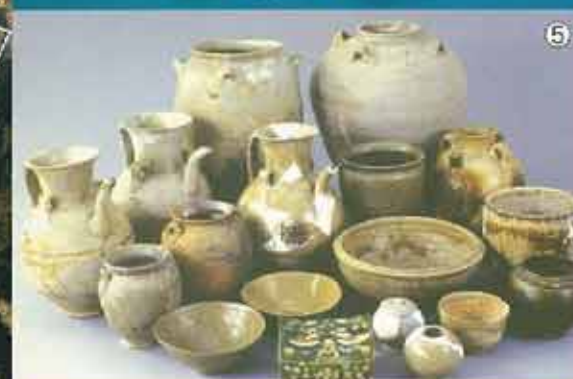
発見から調査まで

筑紫の鴻臚館跡は、江戸時代には現在の博多区下呉服町付近の博多官内町の説が有力でした。1926(大正15)年になって、中山平次郎(九州帝国大学医学部教授)は古代瓦・中国陶磁器などの採集や736(天平8)年に遣新羅使が筑紫館で詠んだ万葉集の短歌をヒントに、福岡城内説を唱えま

発掘されたおもな遺構と遺物



- ①奈良時代の中央堀石垣
- ②礎石建物跡
- ③罽木に使用された木筒
- ④出土した鬼瓦
- ⑤中国産の陶磁器類
- ⑥「東門」の復元図
- ⑦陶磁器の出土状態
- ⑧西アジアの陶器・ガラス器
- ⑨新羅陶器



した(万葉歌碑が鴻臚館跡北側に建っています)。

そして1987(昭和62)年末、平和台野球場外野スタンドの改修にともなう発掘調査で鴻臚館の遺構が検出され、中山説が裏付けられました。

1988(昭和63)年から、福岡市では鴻臚館跡の全容解明のための調査を現在も続けています。

鴻臚館の変遷

鴻臚館は7世紀後半に博多湾に突き出した丘陵上に築られました。大きな谷を南北に挟む尾根を利用して、南館と北館を造成し、谷は濠として取り込んでいました。

飛鳥・藤原時代(7世紀後半)は、掘立柱建物でなっていたが、南館と北館では建物の方向が異なっていました。

奈良時代(8世紀前半)になると、南館・北館とも東に門を持つ塀で囲まれた整然とした施設になります。塀の外には、便所が設けられました。便所の跡からは、用便の際、尻を拭う木片(罽木)がたくさん出土しました。その中には九州各地から送られてきた荷札(木簡)が含まれていました。

奈良時代後半(8世紀後半)になると、展示館内に復元したような巨大な礎石を用いた建物が営まれました。

国際色豊かな出土品

現在の中国の河北省、浙江省、湖南省などで生産された大量の陶磁器、朝鮮の新羅から高麗期の陶器、さらには西アジアのイスラム系陶器やペルシャ系ガラス器などの出土品は、国際的な交易拠点としての鴻臚館の位置を示しています。

国際港湾都市福岡(博多)の原点がここにあると実感されます。